時津町は「家読」を推進しています

たまには テレビをけして

高学年向け　2026年　春号

発行：時津町立時津図書館

家読とは

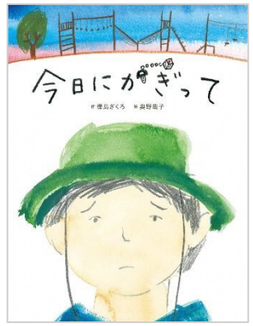
家族みんなで好きな本を読んで、読んだ本について話す。これが「うちどく（家読）」です。難しいルールは要りません。
家族みんなでルールを決めてはじめてみましょう。

家族で同じ本を読みあったり、おとうさんやおかあさんに読み聞かせをしたりと楽しい時間を過ごしましょう。

『やさしいカタチ』

大西 暢夫／著（彩流社）

生まれた時から、自由に動けない人たちが、楽に座れるように工夫された「やさしいカタチ」の車いす。その「カタチ」はひとりひとり違う。車いすができるのを待っている間に、からだの変形が進む人もいる。だから、この車いすを作る人は、その人にだけに合った「カタチ」を作るために、今日も真剣に「やさしいカタチ」と向き合っている。



『今日にかぎって』

樺島 ざくろ／作 奥野 哉子／絵（BL出版）

“今日にかぎって”、自転車のかぎはなくすし、友達のウッチーは先に帰ってひとりぼっちだし、遠くの公園にきたから道に迷うし。不運なことばかり！

そのうえ、苦手なクラスメイトの松田くんにもばったり会ってしまった。

でも、そんな“今日にかぎって”起こる出来事が、思ってもみなかった結果を運んできてくれるのです。

『こどもバイアス事典 「思い込み」「決めつけ」「先入観」に気づける本』

飼 佳吾／監修 バウンド／著（カンゼン）

「バイアス」とは？簡単にいうと「思い込み」「決めつけ」「先入観」のこと。世の中の人は知らず知らずのうちに、このバイアスに影響されておかしな考え方やおかしな行動をしてしまうもの。つまり、簡単に答えを導き出そうとして、近道をしてしまうことなんだ。でも、時にその近道が間違っていたりする。正しい答えにたどり着くためには、この「バイアス」と上手く付き合っていく必要性がありそうだ。

『せなか町から、ずっと』

斉藤　倫／著　ｊｕｎａｉｄａ／画（福音館書店）

海をただよっている“わし”のせなかにできた“せなか町”。そこには、さまざまな変わった人やものが暮らしています。どんなに風が吹いてもなびかないひねくれもののカーテンや、突然なまえを落として、だれからもなまえをよんでもらえなくなった女の子。せなか町で起こる不思議な６つの物語をのぞいてみませんか。

きっとせなか町の住人たちが愛おしくなるはずです。

『読書会を魔女といっしょにやってみたら』

濱野 京子／作 米田 絵理／絵（あかね書房）

青葉野町商店街の中に偶然見つけた「オープンスペース☆黒猫」。そこで大人の読書会を見た稀桜は「本について思いっきり話せるなんて、なんだか面白そう」と思った。そこで店主の愛沙さんに相談して、自分たちの読書会を立ち上げることにした。稀桜の友だちも参加して５人でスタートした。しかし、ただのおしゃべりではだめだし、いったいどう進めれば楽しくなるの？そこで、自称魔女の愛沙さんにはいってもらうことに。すると…。

『ぼくの名前がきえないように』

バティスト　ボーリュー／文 チィン　レン／絵
ひがき ゆみ／訳
（ひさかたチャイルド）

ぼくはフランシスコ。でも、時々、ぼくはぼくじゃない気がする。サッカーにさそわれて、ほんとはあまりやりたくないのに、いいよと返事をした時、転校生をからかいに行こうとさそわれて、断れなかった時。いやなことを「いや」と言えない時。そのあと、コート掛けに書いてある「フランシスコ」の文字が薄くなっていた。このままじゃぼくの名前が消えちゃう！ぼくがぼくであるために、どうすればいいんだろう？